

はじめに

わたしたちが過去を知る方法はさまざまありますが、そのうち「過去から現在に伝わったモノ(資料)を観察する」ということは最も基本的なことのひとつのように思えます。文書や絵図もそうした観察を行うべき対象のひとつです。そこに書かれた文字、描かれた線や塗られた色、あるいは料紙の特徴など、たくさんさんの貴重な痕跡をよく観察することで、いまわたしたちはありありと過去を知ることができます。

新潟町会所とは

かつて信濃川河口左岸にあった新潟町は幕末期に人口およそ三万人を数え、多くの船と人の往来でにぎわった繁華なみなとまちでした。この新潟町には有力な町人から選ばれた町役人たちが集まって町の運営をしていた町会所という所がありました。町会所は貞享五年(二六八八)五月の魚売りに関する文書の奥付けに「会所」という文字がみられるので遅くともこの頃にはあったようです。

この町会所ではさまざまな文書や絵図が日々作られ受け取られ保管されてきました。そのなかで現在確認できる最も古いものは江戸時代初期、慶長十五年(一六一〇)九月の松平忠輝家臣が

「いかた町中」に宛てた伝馬に関する「定」です。「町会所文書」にはこうした町のルーツに関わる近世初期の文書も数点含まれており、そのうち松平忠輝と堀直寄に関する六点は市指定文化財となっています。また「写真」は寛政九年(一七九七)のときに町会所で作られた文書目録です。こうした目録は江戸時代だけでも他に文政三年(八二〇)、天保三年(一八三二)に作られていることが確認できます。

その後、明治十二年(一八七九)に行行政区分としての「新潟町」はなくなり新潟区となりましたが、これらの文書のうち江戸時代に整理されていたものの一部は火災をはじめとした幾多の危険を乗り越え、新潟区がさらに新潟市となった後も保管され続けました。ちなみに「表」は明治十三年(一八八〇)に新潟区役所によって作成された文書目録をまとめたものですが、ここからも町会所に伝わったこれらの文書が町内のみならず、町が関わった諸地域の文書も多く含んでいたことがわかります。さらにこれらの文書に、近代以降一部例外はありますが、おおむね昭和十八年(一九四三)までに作成された文書や地図、写真なども混ざりました。代表的なものには「新潟市史」(昭和九年版)編さんに関わるものや竹内武郎関係の書画など

です。そしてこれら一連の資料は昭和五十年(一九七五)新潟市庶務課から当館の前身、新潟市郷土資料館に「新潟町会所文書」として移管され、現在は当館が管理しています。

おわりに

このように「町会所文書」は江戸時代初期から明治初期までを中心としつつ、二〇世紀半ば頃までに至る近代資料を含んだ、複合的な文書群となっています。こうしたことから「町会所文書」はこれまで新潟市の歴史を紐解こうとする際、たまたび基礎史料のひとつとして用いられてきました。本展ではこうした

分類	件数
旧町会所書類付取締書類	51
地籍関係書類	14
沼垂湊出入書類	52
沼垂書類	49
三湯書類	20
嶋々書類	47
長岡藩ヨリ旧幕府へノ上知御維新迄ノ書	28
新潟書類	40
手当方関係書類	30
寄居村書類	13
寺院書類	11



写真 寛政9年(1797)の文書絵図目録(壹番之入記、貳番・三番之入記、四番之入記、五番之入記、六番之入記(当館蔵))

「町会所文書」のさまざまな史料に光を当て、みなとまち新潟の記憶を呼び起こします。

(あたか しゆんすけ 学芸員)

背景写真 町会所にかつてあり勝楽寺に移された「時の鐘」(当館蔵)

うとするものである」と刻まれています。2019年、国土地理院は13年ぶりに新しい地図記号を導入しました。「自然災害伝承碑」です。「過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害に係る事柄(災害の様相や被害の状況など)が記載されている石碑やモニュメント」と定められ、それらの碑を「地図を通じて伝えることは、地域住民による防災意識の向上に役立つ」としています。10年前の2011年東日本大震災ののち被災地では、過去の被災場所や津波の高さが示され、警句が刻まれるなどした石碑の存在が見直されました。

新潟市の自然災害伝承碑は現時点で6基。そのうちのひとつが「みちびきの像」です。自然災害伝承碑は、全国的にも形態が多岐にわたっているようで、それぞれの経緯でその場所に存在する野外建造物を地域の「災害を伝えるもの」という観点で改めて分類化する試みといえるでしょう。それらは災害史のわずかな一部ですが、身近な災害を意識するアプローチの一つになると思います。ほかの碑については、国土地理院のウェブサイトにてご確認ください。

中村 里那(なかむら さとな 学芸員)



歴史さんぽ

みちびきの像

中央区一番堀通町

新潟県民会館の北口に子供たちの彫刻があります。一見にぎやかに駆け出す姿にも見えますが、これは昭和39(1964)年新潟地震時に避難する小学生たちとそれを誘導する教師をあらわしています。地震から3年後の昭和42



地図記号 自然災害伝承碑

(1967)年、「開港記念100年・震災復興記念新潟大博覧会」が松波町海浜(現西海岸公園市営プール周辺)にて開催され、震災時の小中学校の記録「大地裂くるも子らを放さじ」(新潟市教育委員会、1964年刊)から題材をとった石膏像が展示されました。博覧会事務局が、新潟市の画家・デザイナーである金井二郎(1931~2018)に依頼したものです。博覧会終了後同年11月、新潟地震の復興を記念し、県民の教育・文化の発展と県民生活の向上に寄与する施設として新潟県民会館が開館。そこに、同じ題材のセメント彫刻が「みちびきの像」として新たに建造されました。制作者は彫刻家の早川亜美(1912~80)、昭和38年新潟国体の火焰土器型聖火台(現新潟市陸上競技場所在)や翌年赤塚中学校の白鳥像「飛翔」なども制作しています。台座は新潟青年会議所が寄贈したもので、「地震当時をしのびそのさなかに具現された師弟間の愛情の交流の美しさを後の世まで伝えよ

おすすめの1冊

大学的新潟ガイド

——「だわりの歩き方」

本書の特色は私たちもなじみのある「新潟のいま」を出発点として、現代の新潟を形作ってきた歴史の「新潟のあゆみ」、その背景にある生活文化の「新潟の暮らし」と綴る三部構成とする点にあります。

新潟大学教員による主題の一五章、大学教員に加え各分野の研究者による一六のコラムからなり、日本酒、原発建設計画、水俣病、災害ボランティア、ローカルアイドル、縄文土器、日本海交流等々の多彩なテーマが取り上げられます。新潟という地域を枠組みとして意識しつつ、それぞれのテーマを専門的な知見から読み解かれることで、読者はあたかも博物館の展示を見るように、新潟の姿を理解し、位置づけることができます。

新潟の歴史や文化はそれぞれよく知られたものも多く、しかし輪郭を持った一つの像として捉え難い面があります。本書は、地域の人々が風土の中で積み重ねてきた多様な事象を多面的に着目し、その歴史的経緯と社会的な意味を読み解いて新潟という地域の内実を実感させてくれます。

(森 行人 学芸員)



新潟大学人文学部附属 地域文化連携センター 編集 株式会社昭和堂 発行 2021年3月